開山忌によせて

宮沢賢治を想わせる黒田先生

『楳庵白純大和尚』より

財団法人全日本仏教会国際部長　鎌田良昭

黒田白純先生が亡くなられてから、早や二年有余が過ぎ去ろうとしている。先生の訃報を紙上で知り、愕然たる思いに自失したことを、今さらながら想起する。

満面に笑みをたたえ、慈愛深い眼ざしで接しておられた先生のお姿は、いつまでも忘れることが出来ないだろう。全日仏の事務総長という、事務総責任者として国内外の諸問題を乗り切って来られたのも、先生の細かいお心づかいと、柔和な対応によって出来たのである。全日仏のように、各宗各派のトップが集る団体の仕事は、凡人には仲々運営し得るものではない。先生ならではの手腕にほかならない。

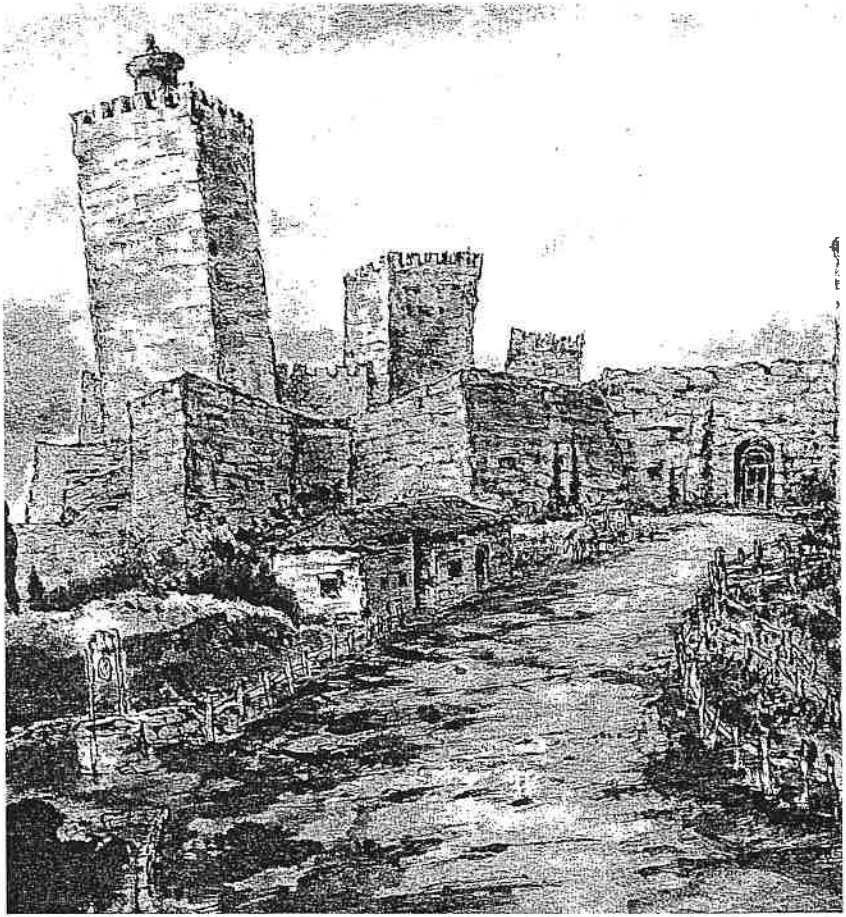
昭和三十九年十一月下旬に、印度のサールナートで、第七回世界大会（WFB）が開かれた。先生は事務責任者として、私は補佐役としてこれに参加した。会場はムラガンダクティビハーラ（鹿野苑寺）の境内で、そこに巨大なテントが張られた野天会場であった。秋とはいえ、日中の陽光はかなりの厳しさがあった。南方の人

は雄弁家が多い。印度英語やセイロン英語で、滔々とやられるのには閉口する。この日も相変らずのスピーチがつづいた。先生は時々うしろをふり返り「何を言っているんです？」といわれた。先生が、終始姿勢を正し、閉目して聞いておられたお姿が目に浮ぶようだ。また、大会終了後は印度仏跡巡拝という難行があり、事務局の思わぬ出費などに、自からお気を配って聞かれ、その都度ご心配を頂いたものである。

あるときは、個人的な私の祝いごとに対して、あるときは私の病気の見舞にと、ご厚志を頂戴したこともある。私の知る限りで、こんなお心配りをされた先輩は、先生をおいてはない。「決シテ慎ラズ……自分ヲカンジヨウニ入レズ……イツモニコニコ笑ッテイル」。私は、常に先生は宮沢賢治のような方であったと思う。このような先生のご指導があったればこそ、ご令息がそれぞれ立派な禅僧になられたのであろう。

しかし、も早やあの慈愛のこもった先生のご尊顔に接することは出来ない。私は文字通り、残学菲才ながら、先生から頂戴した偉大なる精神的遺産を相続させて頂いた。こんな幸せなことはない。今後、自利利他のために微力ながら努力し、ご恩に報いたい気持で一杯である。

謹んで、黒田先生のご冥福を心からご祈念申上げて擱筆する次第である。

（昭和五八年八月二八日）

（原文のまま）